

# ハワイの強制収容所の記憶について

— ある婦米日系人の記憶を中心に —

The Memories of Concentration Camp in Hawaii  
From the memories of one kibe Japanese American.

山 本 茂 美

Shigemi YAMAMOTO

## はじめに

2019年8月11日、中日新聞の記事の中に第二次世界大戦中に強制収容をされたアメリカの日系人の話が載っていた。日系二世のノーマン・ミネタが「第二次世界大戦中に日系人が受けた差別と苦難の歴史を伝える行事に参加するため、今夏も「我が家」に帰って来た。」というものだった。ノーマン・ミネタは下院議員として日系人の名誉回復に努め、ブッシュ大統領の政権で運輸長官として米中枢同時テロの危機管理を担ったミネタの政治活動の原点になったといわれている。<sup>(1)</sup>

このように日系人の地位を向上させるため名誉を回復するため頑張ってきた人物でも、1941年12月の真珠湾攻撃の後敵性外国人のレッテルを貼られ憲法で保証されているはずの市民の自由を奪われ収容所に送られた。<sup>(2)</sup>「監視塔ではライフル銃を構えた兵士が目を光らせていた。」幼かったミネタ氏は今も当時の劣悪の環境と納得のできない待遇を鮮明に記憶しているという。この新聞の記事には現在88歳のサム・ミハラやベーコン・サカタの回顧録も掲載されている。ところでなぜこのような記事は今掲載されているのであろうか。

ミネタたち日系二世の懸念は現在のアメリカ合衆国には当時のような人種偏見による閉塞感が漂っていることだという。日系アメリカ人の研究をしてきた一人の人間として現在の白人至上主義への危険を強く感じていたのも、この二世の人物たちが声を上げたことに強く賛同したいと考える。どんなことがあっても人として相手に対しても同じように平等に扱うこと、誰でも夢を持って移民できる国であったことを守ってほしいと思っている。自由と平等のために闘ってきた多くの国民の努力を無駄にしてはいけない、と。しかしミネタたちのこの動きが掲載されるほどアメリカ合衆国の中で人種偏見の問題は大きなものになっているのだろう。今後ここに登場した人たちの動きを静かに応援したい。

さて、近年研究しているハワイの日系人の書物を多く入手して読み進めるうちに。ある日系アメリカ人、特に婦米アメリカ人のインタビューで太平洋戦争の時代の様子を述べている記録書の中からハワイの収容所の内容も調べていこうと考えた。特に今までハワイでは強制収容があったことはほとんど知られていなかったがこのインタビューの中で自身の収容体験が述べられているので、その内容を

中心に調べていくことにした。

## 1 ハワイの日系アメリカ人の歴史

ここで改めて本土ではなくハワイの日系アメリカ人の歴史についてまとめられた記述を考察していきたい。「ハワイ日系社会ものがたり」<sup>(3)</sup>の本の中では6期にわけてハワイの歴史を説明している。ここでは、その記載から、ハワイの歴史をまとめていきたい。

### 第一期 前史(1868年～1884年)

元年者約150名のうちハワイに残った100名のみが形成したコミュニティ。なかには先住ハワイアンと結婚し、立派な二世を育てた人もいた。彼らはまじめに働き、労働者としての日本人の評価を高めたと思われる。そのことがハワイ王国による日本人移民要請につながったと考えられる。

初期の移民の中には日本から漁に出て遭難してハワイに流れ着いたものもいたという記録がある。

### 第二期 出稼ぎ期(1885～1907)

明治政府とハワイ王国が官とした官約移民の開始(1855)から紳士協定締結まで。

日本人移民の大多数が3年程度の契約労働が終わってしばらくすると帰国するつもりの出稼ぎ根性であった。一方で日本語新聞・雑誌などの日本語メディア、日本語学校(日本人学校、日系宗教、商工会などの結社、機関、すなわちエスニック・エージェンシーが生まれる。

この時代の移民については、日本政府の記録が多く残されていて、筆者が卒業論文<sup>(4)</sup>で1924年排日移民法について調べたとき当時の日本の新聞にも多くの記事が見られた。

### 第三期 一世最盛期(1924～1940)

排日移民法施工(1924)から太平洋戦争勃発前まで。家族形成期。写真結婚により妻を呼び寄せ、二世が生まれ家庭を築く者が増加。

学齢に達した二世を日本の親戚に預ける「日本留学」が盛んになる。彼らが戦前、戦後に再びハワイ本土に帰ってきて新たな「日本語後族」として参入する。彼らは二世なので生まれながらにアメリカ市民であるが、その特異な体験から「帰米二世」と呼ばれる。一般の二世たちは午前は公立学校、午後は日本語学校に通った。

昨年論文に書いたように、二世たちが日本に留学している間に太平洋戦線が始まって、アメリカに戻れなくなった人たちがたくさんいた。その中で日本軍に招集され最後は特攻隊に入ったものもいた。彼は戦後生き残った人生を、英語を話せることでアメリカと日本の懸け橋になって生きたという。<sup>(5)</sup>

又二世成長、成人期。上記のエスニック・エージェンシーが充実する時期。日本語新聞をはじめとする日本語メディアの最盛期。日本人の定住意識が強まる。1930年代に米本土西海岸から労働組合の活動家が来布して組織化を開始、プランテーション労働者を中心にかなりの成果を挙げるも、太平洋戦争の勃発により戒厳令が敷かれ活動停止を余儀なくされる。

### 第四期 二世台頭期(1941年～1945年)

日系人受難期。1941年太平洋戦争勃発。日本軍がハワイのパールハーバーを攻撃。日本語新聞、日本語学校、武道、日系宗教、日系ビジネス等に携わっていた日本人リーダーや帰米二世らが逮捕され、約2,500名(家族を含む)が米本土の収容所へ、約350名がハワイ内のホノウリウリなどの収容所へ送られる(なお、米本土では、西海岸に住む11万人余り余りが内陸部の11か所の収容所に送られている。)特にハワイでは日本語を母語とする一世や帰米二世の主だった人々が強制収容され、しかも日本が対戦国だったため、英語を

母語とし米国市民である二世が日系社会内で急速に勢力を増す。ヨーロッパ戦線では二世からなる日系人部隊 (第100大隊, 第442連隊) が奮闘, 太平洋戦線では帰米二世を含む二世からなるMISが日本兵への訊問や日本語の翻訳等で貴重な役割を果たす。二世兵士の大活躍がアメリカやハワイでの日系人の地位向上につながるはずだと日系人の多くが期待した。

ハワイでも二世たちの多くはハワイ軍政府に対し積極的に協力。二世リーダーが非常時奉仕委員会などを結成してハワイ郡政府と密接に連絡を取りながらハワイ日系社会を戦争協力へと導く。

強制収容所の二世たちはアメリカ市民でありながら敵国外国人と同様に扱われたことにショックを受け何とか自分たちの名誉を回復しようとした。そして442部隊に参加することで家族の取り扱いが変わったことが当時の自叙伝を描いた多くの二世たちの分で述べられている。収容所の中で発行された日系新聞の中にもそのような記述がみられる。しかしハワイからは参加した人数はほとんど記録されていなかった。<sup>(6)</sup> ここでハワイの実態が少し把握されるようになった。

#### 第五期二世最盛期 (1946年～1970年代)

第二次世界大戦終結, 日系社会の再出発から二世が政治, 行政, 教育, ビジネス等の分野に大量進出する時期。戦場からハワイに帰還した二世たちがGIビルによって大学や大学院へ進学。卒業後, ビジネスや法曹界に進出して頭角を現す。日系二世リーダーのうち民主党を支持する者たちは, 戦争中に日系人と親しい関係を築いていたジョン・バーンズ (戦中にホノルル市の警察として日系社会と頻発に接触) らと政界に進出。1954年のハワイ議会選挙で圧倒的な勝利を収める (民主党革命)。それまではハオレの財閥が支持する

共和党が政界を牛耳っていたハワイに大変化が訪れる。

・・・

一方, 一世はどうしていたか。戦前に, 日系社会の中心的役割を担っていたリーダーたちが本土の収容所やハワイの収容所から職場へ復帰する。日本語学校も再開し, 日本映画や日本語ラジオも復活する。しかし, 戦中に主導権が二世に移動していたため, 戦前に比べ一世の勢力は減退する。そのような中, 帰米二世が戦後ハワイの日本語世界で活躍ようになる。なお1952年移民帰化法の制定により, 「帰化不能」とされていた日本人 (一世) もアメリカ市民になる道が開かれた。日系社会の長年の悲願が成就したわけで, 涙を流して喜んだ一世も多かったという。

しかし長年日系アメリカ人の自叙伝や日系新聞などを研究していた中で, ひどい扱いをされたアメリカに対して反感を持っている一世もいてかたくなにアメリカ市民になることを拒否したという。<sup>(7)</sup>

次に戦後の日系社会で特筆すべきは戦争花嫁 (ハワイでは軍人花嫁と呼ぶ) の来布である。終戦直後から朝鮮戦争にかけて相当数の戦争花嫁が軍人だった夫に連れられてやってきた。<sup>(8)</sup> 彼女らは帰米二世同様, 日本語族 (一世) の貴重な後継者として, 日本文化・沖縄文化の維持発展に大きく寄与することになる。

戦後の二世の勢力拡大は勢いを増し, 1959年ハワイが50番目の州に昇格するや今度は国会議員 (連邦議会上下両院の議員) に選出される二世が続出する。日系二世の絶大な支持を得てハワイ州知事になったジョン・バーンズは副知事に二世のジョージ・アリヨシを指名。バーンズ引退のあとアリヨシは1974年以後3度の州知事選に勝利し, 全米初のアジア

系州知事として1986年まで執務することになる。

このような政界への進出はハワイだから早い時期に実現しているが、本土では一層の逆風がおこり、なかなか力を発揮できなかった。このような経緯については今までの論集のなかで研究し、ハワイでは日系人の比率が高く社会の中で中心的な役割を果たしていたので実現したという多くの研究がみられる。

70年代に青年期を迎えた三世はベトナム戦争世代として、二世とは異なる形で自らの生き方を模索する。一世二世が強く背中を押したこともあり三世の間では高学歴化が進行し、言語生活を中心にライフスタイルとしてはアメリカ人そのものと言われるまでになる。

この時期三世を中心として自分たちのアイデンティティを模索し始め、強制収容所に入れられた一世二世への政府の対応に抗議する動きが出てきた。彼らは口の重かった一世や二世に戦前戦中の生活に対してヒヤリングを始めた。今まで何も語らなかつた一世たちは、多くの経験を語り始めた。このことにより二世を中心として多くの自叙伝が出版されるようになった。以前は出版社から見向きもされなかつた作者の本がどんどん出版された。このことからさらにヒヤリングが盛んになり、1988年の市民的自由法が成立した。この経緯について筆者がいくつか書いてきた。<sup>(9)</sup>

第六期三世最盛期（1980年代～2010年代）

アメリカ化が完璧なまでに進行した第三世代であるが、いっぽうで日本語やウチナーグチを学んだり、日本の文化、大衆文化に強い関心を示したりする人々が一定数いるのも三世の特徴である。堂々とエスニシティを標榜したりエスニック文化を追求したりすることができる場所に三世の精神の余裕、自信が表れているといえよう。それを裏打ちするの

が大状況としてのアメリカ社会全体そしてハワイ社会の多文化主義の進行である。

三世及びその次の世代は二世以前の世代に比べれば「日系人意識」にこだわらないといわれる。たとえば、日本文化に強い関心はあるが投票行動は別であるという人は少ない。二世までは日系候補というだけで投票する人が多かったのに比べると大きな変化である。あくまで政治家としての能力が判断材料なのである。2015年末に州知事に選出されたデービッド・イゲは日系人として2人目、オキナワンとして最初の州知事であり、2012年にリングダ・リングル（元州知事）という白人候補を破ったメイジー・ヒロノはアジア系女性初の連邦上院議員であるが、彼らはその「日系」という属性もさることながら、その有能さゆえに選ばれたとみるべきであろう。こうした日系をはじめとするアジア系の社会進出を担保するのは、アメリカ社会がまだ民主的な多文化主義を維持する力があるからである。しかし昨今の大統領選挙の様子から偏狭な反知性主義的保守主義の影が濃くなってきていると感じるアメリカ人も少なくない。もっとも、偏狭な反知性主義の広まりという点では他人事ではない。

初めにミネタについて紹介した中でも彼は人種偏見による閉塞感が漂っていることを懸念していることを述べたが、今やどの日系人も戦時中の差別の苦悩を思い出しているということである。長い間この悲劇を研究してきた筆者もこの懸念がやがて大きな波となってアメリカ社会に影を落とすかもしれないと感じている。

## 2 ハワイの収容所について

さて改めて本土の日系人はほぼ全員アメリカ市民権をもつ二世たちさえも強制収容所に送り込まれた。この歴史的事実については今

まで多くの本や新聞さらに映画なども参考に当時の日系人の生活、差別の中でも辛抱強く生き抜いた記録を追い続け、1988年の市民的自由法が成立するまでの二世三世の運動を追った。過去を恥と信じ重く口をつぐんだ一世たちの心を開いていったヒヤリングの内容も追っていった。今まではどんな本を出そうとしても決して日系人にチャンスがなかったが時代が後押しして多くの本が出版されるようになった。それに伴って二世三世も文学作品を出版するようになったが彼らの本の中には必ずと言っていいほど差別された過去の様子が描写されている。日系人の中にいかに強制収容されたことが心の傷になっているか感じてきた。しかしその中で強制収容されたのは本土の日系人と特に危険だと考えられたハワイから送られた日系人だけであると記録されていた。そこで今回ジャック・田坂のインタビューを収めた「ハワイ日系人社会ものがたり」の中でハワイの強制収容所に入れられたという記述にとっても驚かされた。

本土の強制収容所での実態を多くの作品や日系新聞を通じて紹介したように今回はハワイの強制収容所の実態を中心に研究をしたいと考えた。ハワイの収容所について語っているのはジャック田坂という日系二世の人物である。彼は若い時に両親の故郷であり、又社会の「有名人」であったためこの本の出版が可能になったという。先に述べたように彼は典型的な婦米二世である。彼は、戦後しばらくは日本語ラジオで、次に日本語の新聞や雑誌といった日本語メディアで日系社会の人々に語り続けたのだという。そこで日本語族と呼ばれる人やハワイの日系人の歴史を研究してきた作家や研究者にとって知らない人がいないほど有名だ。と紹介されている。ハワイ日系社会ものがたりを編集した白水氏は1985年から86年にかけてハワイに滞在したが、そ

の間、幾度となく田坂宅を訪問し、その後もハワイに行くたびに多くの歴史を来たのだという。<sup>10)</sup> 筆者は長い間本土の日系人の歴史を研究していたので彼の存在を知らなかった。このような日系人の生の声を聞けなかったことは非常に残念である。今回のこの本を通じてこのようにハワイの歴史、体験談を通じて本土の日系人とは違う体験を記録された史実を確認したいと思う。

戦前日本語学校の教師などをしてきた田坂は戦争が始まり、学校が閉鎖されたのちヒロに行った。すでに収容されたしまった畑商店という酒造会社の管理を任されたのだという。酒造所に残された酒をわざと時間をかけてビンに詰めていたのだという。残された日本人の生活を守るためだったそうである。彼は片道だけの切符でヒロに入ったからホノルルから引き揚げてヒロに帰ったとみなされホノルルへ戻れなかったのだという。

そこで準州議会の上院議員で弁護士の人物にお金を払ってホノルルに戻してもらったということである。戻るとすぐにFBIが連れにきて収容所に入れられたのだという。ヒロにいたので免れていたが、ホノルルのブラックリストに載っていたのだそうだ。

婦米二世を調べるのに最後の船で帰った婦米二世から調べていく。だから移民局を逮捕のための調査のヘッドクォーターにしてあった。移民局に全員分のネーミングリストがあって最後の船で日本から戻ったものからどんどん調べていった。坂田は37年にハワイに戻ったので連行されたのはあとのほうであったが4、5回呼ばれた後で収容されることになった。さてその収容所についての描写を見たい。

婦米二世で1937、1938年からあとに帰って来た人はほとんど捕まったそうだ。「お前はアメリカのために尽くすかどうか」と「いぬ

になるか。」イエスといえば家に帰れたという。そこでノーというとな収容所に一步近づく。その後 appeal する権利を形式上与える。移民局に置いておいて弁護士を雇って証人を呼ぶことができたという。本土の日系人のように数日で収容所に全員送られたことを考えればまだ人権が守られていたようにも思える。密告者は収容所に送り込むことができれば50ドル、普通のレベルのものが入れれば25ドルもらえたので密告者はそれで生計をたてられたのだという。

### 収容所での生活

田坂が入れられたホノウリウリは、ファーンリントン・ハイウェイができて、街そのものが二つに切れた。その中でホノウリウリというよりクニア地区にあった。収容所はずっと山の奥の谷間。周りは山だらけ、完全に谷の陰に隠れていた。キャンプの外は、みんなキアベとコアなどの木々が茂り、荒地になっていたそうだ。荒地であるというのは本土の収容所と同じ環境といえよう。収容所の小屋はサトウキビ畑をブルドーザーをかけてその周りに高い鉄条網が二重に張ってあった。鉄条網のそとはみんな荒地だったという。周りには塔が3つ4つあった。本土も同じく鉄条網に囲まれさらに銃を構えた兵士がいて、誤って鉄条網に近づいたものは打たれて死んだ。

男性の収容施設はキャンプの真ん中にあり女性の収容所も3つほどあったと書かれている。ここで注目したのは、ドイツの収容所やイタリアの収容所もまわりにあったという記述である。本土でも多少あったと書かれた資料があったが、第一次資料はまだ見つけられていない。

では坂田たちはどんなところに住んでいたのだろうか。彼らの居住所はシャックと呼ばれる掘立小屋だった、部屋には番号がついて

いた。8人が一部屋の場合もあり狭くマットレスをひけるように1×6フィートの底が抜けていたという、

では収容所ではどんな生活をしてきたのか。

### 収容所での生活

アーミーディフェンスというものが収容所にはありワンダラー・デイで皆が働いたという。のみとカナがあれば仕事ができたといい。半年もしたら隙間ができ

ガラスのかわりに張られたスクリーンがこわれ修理の仕事がたくさんあったのだという。サトウキビ畑の跡地なので蚊が大量に発生し蚊取り線香なしにはどこにもいけなかったという。これは砂漠の中の収容所に入れられた本土の日系人と違っている。また男女別々の収容所に入れられたというのも本土の収容所と違っている。どうして別々に収容されたのかは当時の軍の資料を探さなければならない。坂田の入れられた収容所の奥には15000人の朝鮮人の捕虜収容所があったという、そして日系人の捕虜は朝鮮人の捕虜の収容所と日系人の収容所のあいだのくぼ地に張られたテントに収容されていたのだという。

昨年戦前戦後のハワイの歴史を研究した折、墜落した飛行機から生き残った飛行士を日系人がかくまったが近所の人たちに殴られて殺されたという話が記録されていた。その記述を読む限り日本人捕虜となった人たちはまれであることが推測される。

収容所には総領事館に勤めていた地元の人たちも多く収容されたという。彼らは日本のスパイだったのだそうだ。

収容されたキャンプにはどんな施設があったのであろうか。そこには大隊長、中隊長・小隊長がいてそこに米軍の憲兵がいたという。医師も日本人がいて歯医者もいた。中にいる二世たちは軍隊用S Tのズボンが配られ

それを身に着けることになった。しかし大きなサイズなのでそれを切るために洋服屋さんもいたという。髪を切るための散髪屋さんもいたという。本土の収容所では自分たちの今までの仕事の技術を持ち寄りコミュニティを作っていたことを考えると比較的生活が自由だったことが推察できる。この技能のある人たちは本土の収容所に送られることもあった。その時はすぐに次の人たちが収容所に仕事をしに入ってきたという。軍はハワイの日系人のリストを作っていたのでいくらかでも変わりの人がいたのだという。

さらに売店もあったという記述もあった。いちいち差し入れを頼まないといけなかった本土の収容所とこの点でも大きく違う。又収容所での食事の準備には有給の人たちとお金のもらえないものもいたという。国際赤十字で捕虜は一日10セント月に3ドルもらえた。という記述もある。本土の収容所の人たちにお金が支払われたという記録はない。これは捕虜扱いの日系人と違う立場だったからであろうか。

さまざまな簡単な仕事でお金をもらうことはできたが、基本的にはすることがなかった収容所の人々は、みんな三々五々集まって話をしていたという。当時ハワイでは5人以上の日系人は集まれなかった。マーシャルローで決められていた。街角で集まったら逮捕された。もちろん結婚式も葬式もできなかったのである。さらに日本語を話すことを禁止された。ところが収容所では何人で集まっても日本語で話してもかまわなかったわけで囲碁、将棋、麻雀、花札、トランプのような遊び道具は差し入れしてもらえたので少し賭け事をして生活を楽しんでいたという。<sup>(11)</sup> この記述を読んだとき今まで数多くの本土の日系人の研究をしたときに読んだ生の声を思い出した。彼らは身を粉にして畑仕事な

どの肉体労働に従事して自分の時間をもつことはできなかった。皮肉にも収容所に入れられたことで仕事をすることができなくなりペンを持って収容所での生活や収容された時の自分の気持ちを文にし始めたのである。渡米してからの自叙伝をまとめた人もいた。これがきっかけで日系文学が生まれてきたことを研究した。ハワイの日系人は日本語学校や日本政府とのつながりがある人が収容されている。つまりハワイの収容者は教養のあるものが多く肉体労働からはかけ離れた生活をしてきたことが本土との違いを生み出しているのだろう。

さらに本土との生活の違いとして、野菜部隊というものに志願すると3時間ぐらい収容所の外の空き地に畑を貸してくれてそこで10人ぐらいで畑に野菜を植えに行けたのだそうである。しかしそういう時はマシンガンを持った憲兵がついてきたと書かれている。本土の収容所では酔っぱらって塀に近づいて撃ち殺された人やよろけて塀に近づいたために撃ち殺されたという悲劇の史実が多く残されている。扱いは少し違ってもアメリカ市民である二世たちがただ日本人の血が流れているだけでこのような不当な扱いをされていたことは忘れてはいけないと考える。

### 3 第二次世界大戦後

アメリカが優勢になってもうハワイに日本が侵略してくるだけの力がなくなったとみたときアメリカ政府はお荷物になった二世たちを出していくことを考え始めた。裁判で良い証人がいるという人物から少しずつ釈放したのである。<sup>(12)</sup> 政府は帰米二世たちの若い少し英語のわかる人材が欲しかったそうである。彼らはその後陸軍学兵養成学校の教官や通訳兵になった。このような歴史の中でハワイの二世たちを中心とした日系人たちは今まで以

上に努力をしてアメリカ社会で地位を高めていった。彼らの活躍については今までに日系文学を中心に研究を続けてきた。研究の中心は本土の日系人についてだったがこれからハワイの日系人の活躍、どのような文学作品があるかなど研究を続けたいと考えている。特に田坂氏は日本語新聞の発刊に大きくかかわっているので手元に入手出来ている日本語新聞を詳しく調べていき戦後の日系人の生活信条などを研究していこうと考えている。

### 終わりに

2019年8月16日の中日新聞には次のような記事がある。

6月22日、米南部オクラホマ州ロートンのフォート・シル陸軍基地。日系四世のオーラ・ニューリンは約200人の抗議デモの中に身を投じていた。参加者は約2万羽の千羽鶴を手にしていて。トランプ政権が、保護者を伴わない不法移民の子供たち約1400人を収容する施設を建設し、一時的に拘束する方針を打ち出したためだ。

基地は1942年4月から5月にかけて日系移民（一世）約700人を「敵性外国人」として一時的に収容した施設の跡地にある。デモには強制収容の経験のある日系二世らが「保護を求め無実の子供たちに、私たちが受けたような不当な扱いを強いようとしている。」と声を上げた。

日系人の強制収容と移民の収容はすべてが同じなわけではないがそれでもやはり類似点があることは否定できないと語っている。「米政府は日系人に謝罪した。それだけに二度と過ちを繰り返さないように気を付けなければならないし、繰り返さないようにするためにも私たちは行動する。」とハートマウンテンワイオミング財団の理事長日系三世のシャーリー・ヒグチはいう。<sup>(13)</sup>

強制収容という事実は何年たっても何世代にわたっても大きな傷として残っている。この傷は活字として多くの人たちに知ってもらわなければならない。なぜならば大きな傷があるからこそ同じようなことが起こらないように多くの日系人が運動をしているのだから。

今回は、白水氏たちの本を手にした後でこの新聞の記事を目にしたが、深く根付いた差別に対して戦う姿を多くの作品を通じて研究していきたい。

### 注

- 1 中日新聞2019年8月11日一面 日系人の強瀬収容—1942年2月19日、フランクリン・ルーズベルト米大統領は前年12月7日の日本軍による真珠湾攻撃と日米開戦を受け、大統領令9066号を発令。諜報活動や軍事施設などに対する妨害活動を防ぐという名目で、特定地域を軍の管理に指定する権限を陸軍長官と軍司令官に与えた。軍は米西海岸とアリゾナ州の一部を管理地域に指定し、4万5千人の日系人と7万5千人の二世三世の計12万人が10か所の荒れ地に作られた強制収容所に隔離された。ワイオミング州のハートマウンテンもその一つで計約1万4000人が収容された。
- 2 中日新聞、7面。
- 3 白水繁彦、鈴木啓編、A History of Hawai's Japanese Narrated by a Kibei -Nisei, pp15-20, 2016, お茶の水書房。
- 4 1980年東京女子大卒業論文のテーマは「1924年の排日移民法とその背景」である。
- 5 2017年3月「金城学院大学論集」人文科学編第12巻第2号
- 6 筆者は多くの収容所の関する資料を研究してきた。
- 7 収容所で発刊された羅府新報の記事の中にくつか載せられていた。
- 8 白水、p18。
- 9 1991年の修士論文のテーマは「1988年の市民的自由法の成立とその背景」である。
- 10 白水、p4。



- 11 白水, p118.
- 12 中日新聞2019年8月16日7面。

### Work Cited

- メアリー・ツカモト, エリザベス・ピーカント,  
「アメリカを動かした日系人, - 第二次世界大  
戦の強制収容所と日系人の戦い」, 琉球新報社,  
沖縄市, 2001年  
白水繁彦, 鈴木啓編, A History of Hawai's Japanese  
Narrated by a Kibei -Nisei, お茶の水書房, 東京,  
2016年。  
中日新聞2019年8月11日—16年

### Work Consulted

- 北村崇郎, 『一世として生きて』, 草思社, 東京,  
1992.  
黒川省三, 『アメリカの日系人』, 教育社, 東京,  
1979.  
鶴田真, 『日系アメリカ人』, 講談社現代新書, 東京,  
1971.  
前山陸, 『ハワイの辛抱人』, お茶の水書房, 東京,  
1986.